

終わってからでは、お母様がH君を学校に迎えに行く時間に間に合いません。そこで、週に1度、お母様に代わって私が学校にHくんを迎えに行くことにしました。二人で街を歩き、電車を乗り継いでH家の最寄り駅まで行きます。駅の近くのファーストフードの店でお茶を飲みながらお母様のお迎えを待ちます。この時間がメールの「おはなし」の延長になりました。メールよりもっとじかに話せるので、分からないことや理解できて喜ぶ様子が見えます。指文字より速くてたくさん話のできるプリスタも使っています。ちょっと言葉が途切れると、「もっと話してよ！」と私の手をゆすって、指文字を出させようとしたり、プリスタを私の身体に押し付けてきたりします。嬉しいことですが、私はまるで、スイッチを入れると話し出す「おはなしマシーン」のようで苦笑してしまいます。この、週に1度の「おはなしデート」は、今でも続けています。

H君にとっては、家族と先生以外の人と街を歩くことも新しい経験です。H君自身の自立や親離れと同時に、一人っ子のH家では、親の子離れの体験にもなっているかと思っています。

「おはなし」といっても、内容の想像がつきにくいかと思しますので、ちょっと例としてお話します。大宮ろう学校の校門を出たところに電信柱がありました。狭い歩道に太い電柱。毎日通るときによけて通っても白杖や肩が触れていました。その電柱が取り除かれました。H君の知っている触れる世界の中で、これは大事件です。これがきっかけで、電気のことについての話が盛り上がっていたころでした。電気は電線を流れて運ばれること。各家庭に配られている様子。電気を使っている道具。発電についての話もしました。特に水力発電の話から、ダムの話も出て、水力発電所は山の中にあることまで分かってくれました。そこで一つ質問をしてみました。「山の中で作った電気はどうやって都会まで運ばれるのかな？」プリスタで話しあっているときでした。

答えようとして、プリスタに指をかけたHくんですが、「やまから・・・うみまで・・・」手が止まってしまいました。私の質問の点字を繰り返し読んでいます。『何に引っかかっているのかな？水と電気を間違えたかな？』しばらく待ちました。次に、H君からでた質問はどんなものだったと思いますか？・「トカイは、どこの海ですか？」・・・

H君へのメールは、できるだけかな文字を使います。漢字を使うと、パソコンが誤読することがあるからです。このことから、漢字にはいろいろな読み方があることを話しました。「月曜のゲツはツキ」「水曜のスイはミズ」・・・そのとき「日本海のカイはウミ。東海道のカイも、ウミという字よ」と話しました。つまり、「都会」という言葉を聞きなれていなかったのも、どこかの海だと思ったのです。子供がどこに疑問を持っているかを察するのは難しいですね。

H君だから「おはなし」ができます、H君とは10年間もの交流で気心が知れていること、成長過程も、現在の知識の程度も知っているからできることです。それに加えて、ご両親と担任の先生方との交流もあり、ある程度信頼していただけているからできることです。

今年に入って、選挙があったときのことでした。選挙についての「おはなし」をしていました。H君からのメールに、忘れられない言葉が書かれていました。

「僕もあと3年すると、選挙をします。それまでにもっとたくさんのことを覚えておきたいと思います」 Hくん知識欲が芽生えたことが分かります。

重複学級での教育の中で、「誰にでも愛され、相手の気持ちを大切に考える」というH家の望んだ教育は十分にできています。しかし、学年に応じた知識には遅れがあったことは確かです。今、高校生になって、知識を吸収し、思考力を高めようという意欲が出始めたということです。この遅れは、健聴の子供なら、小学校入学以前に身につけている「言語」の獲得に使われた時間です。

教育より先に、病院通いが長かったり、視力・聴力のハンディを克服して、日本語を手に入れる期間が必要な子供たちがH君だけでなく、他にもたくさんいると思います。

H君が私に、「もっといろいろなことを覚えたい」と言ってきたのは高校生になってからです。学校ではすでに卒業後のために、「授産所の現場実習」が始まっていました。

今私は、年齢や、教育を始めてからの年数だけを目安に義務教育、あるいは教育の期間を決めてしまうということへの疑問を強く感じています。子供自身に、これ以上の知識欲が無いのなら別です。全ての教育の元になる言語を手に入れるために、一般より長い期間が必要だった子供たちには、それに応じて教育期間の延長ができる方が良いのにはと思います。国や自治体の規則など、難しい問題は民間人の私には分かりません。高校が終わってもH君に適した教育を続けられる場を見つける、あるいは整えてほしいと思っています。

H君は、大勢の人と同じ部屋にいることや、大勢の人たちの前で話をすることが大好きです。「今、この部屋には、何人ぐらいの人がいる」とは伝えました。でも、H君が久里浜に来て出会えた人の数は、じかにH君の手に触れてくださった方の数です。

明日までご一緒します。チャンスをみつけて是非、H君に声(手?)をかけてあげてください。メール友達になってくださったらもっとうれしいです。

ポスターセッション

ポスターのテーマと発表者は以下の通りです。

テーマ	発表者
Y君との1年間	埼玉県立大宮ろう学校 伊藤 美和 氏
ひとりひとりのニーズに応える 授業づくりとは？ ～ 肢体不自由特別支援学校の中における 盲ろう重複児の授業実践～	福岡市立南福岡特別支援学校 宮崎 広子 氏
サポートブックの作成とその活用	愛媛県立松山盲学校 石山 香代 氏

中学部における盲聾実践のまとめ	筑波大学視覚特別支援学校 宇野 和博 氏 左振 恵子 氏
盲学校における新しいスポーツ・レクリエーション ～フリークライミングへの挑戦～	神奈川県立平塚盲学校 米山 美穂 氏
視覚障害者グループホーム	社会福祉法人横浜訓盲院 鳥居 正義 氏
写真で語るヘリコプターの活動	盲ろう児家族 宮口 克巳 氏
日本で初めて行われた盲ろう教育 ～山梨県立盲学校での革新的な実践と、 今日までの影響を振り返る～	山梨県立盲学校 引田 秋生 氏 国立特別支援教育総合研究所 中澤 恵江 氏

< 8月10日 >

講演「おとなになった先天性風疹症候群の子どもたち
～1960年代に風疹の大流行のあったアメリカの経験と智恵から学ぶ～」
ヘレンケラーナショナルセンター 特別プロジェクト・コーディネータ
ナンシー・オドネル 氏



アメリカとインターネット回線を結び、オドネル氏の生の講演を中澤会長が継時通訳するという形で行いました。以下に、講演の概要を掲載いたします。

ナンシー・オドネル 氏

最初に、どこに住んでいようと先天性風疹症候群の方が抱える課題には共通性があるということをおさえておきたいと思います。

ヘレンケラーナショナルセンターとは

アメリカ合衆国における盲ろうの唯一のセンターで、16歳以上の青年および成人で、盲ろうである人のみを対象としています。先天性および後天的な盲ろうの両方をふくんでいます。キャンパスには訓練施設と寄宿舎があり、あらゆる原因により盲ろうになった人の訓練に携わっています。ほとんどの訓練生は職業的な目標を持っています。

情報提供と権利擁護のための10の地方事務所があり、ニューヨーク本部に

は、二つの主要な訓練プログラムがあります。ひとつは、「伝統的プログラム」で、コミュニケーションの力があり、計画に従った訓練プログラムにのることができる盲ろう者が対象となっています。もう一つは、「PATHプログラム」であり、発達の遅れがあり、機能的な訓練内容からより多くの利益を得られる盲ろう者を対象としています。

私たちは、親と共に仕事を進めています。たとえば、CHARGE症候群財団、盲ろう者のための全国家族協会(NFADB)などで、歴史的に、家族は常に、法律の成立やプログラム開始の後ろで支えていました。私たちが先天性風疹症候群について研究をするよう励ましてくれたのも親たちです。

「風疹」「母体風疹」について

それでは、さまざまな用語(風疹、母体風疹、先天性風疹、先天性風疹症候群)を整理しておきましょう。

まず、「風疹」についてです。風疹は、1814年に初めて固有の疾患としてドイツの医学誌で報告されました。風疹のよく知られたもうひとつの呼び名は、「ドイツはしか」(日本では三日ばしか)です。症状としては、平たい赤ピンの発疹、軽度の発熱、疲労感、上気道感染、関節痛、腺の腫れなどがあげられます。感染者との接触から広がり、確定するためには検査が必要ですが、いつも行われているわけではないため診断が困難です。また、長年にわたって、「無害」と思われていました。

次に、「母体風疹」についてです。妊娠中の女性の感染で、風疹に感染した人の50%までは(妊娠中の人を含め)症状がないか、一般的な軽い症状のみを呈します。

1940年の流行

この「無害な疾患」の流行をオーストラリアは1939-41年に経験しました。

1941年、オーストラリアの眼科医ノーマン・グレッグ博士は診療の中で、先天性の白内障をもつ乳児の若い母親78名から話を聴きました。全員が妊娠中に風疹にかかっていた。その結果、彼は、「母体風疹」と白内障のつながりの可能性を示唆しました。このつながりを考えたのは、彼がはじめてでした。しかし、彼の理論は何年も退けられていましたが、その後、何人かの研究者がグレッグ博士の理論を支持するようになりました。

そして、オリバー・ランカスターが1879年以来のオーストラリアで聾の子どもの多く生まれる状況の研究を行い、その結果を1951年に報告しました。たくさんの聾の子どもの誕生が、いつも風疹の流行の9ヶ月後に起こることを発見したのです。

先天性風疹・先天性風疹症候群について

先天性風疹とは、母体風疹によるウイルスに胎児が感染することです。以前、胎盤は胎児を守る進入不可能なバリアと考えられていました。しかし、それは誤りでした。

次に、先天性風疹症候群についてです。

先天性風疹症候群とは、子宮の中で風疹にさらされた幼児の幼児の約85%にあらわれる一群の症状です。風疹ウイルスは、細胞成長を停止あるいは抑制

することによって、全ての臓器を冒す可能性があります。そのために、胎児の死亡、自然流産、早産あるいは先天性の欠陥をもたらすことがあります。なお、妊娠中の女性が、うっかりワクチンを接種してしまった場合、先天性風疹症候群を有する赤ちゃんが誕生した事例はこれまで一例もありません。

一般的な早期の徴候としては、低体重出産（満期産にも関わらず）、聴力損失、心臓欠損、先天性白内障、小眼球、風疹網膜症、緑内障、血小板減少性紫斑病（皮下出血）、肝臓と脾臓の損傷、肝炎、発達の遅れ、自閉症あるいは自閉的傾向などがあげられます。そして、報告されている行動特性として、過敏で怒りっぽい、吸い付き反射が弱い、食べ物の好き嫌が多い、睡眠時間が安定しない、自閉症あるいは自閉的傾向がある、体を揺らすこと、目を押すこと、光を見つめること、眼前で指をひらひらさせること、変化への対応が困難なこと、多動性、触覚防衛などが報告されています。

多くの場合、先天性風疹症候群で顕在化する唯一の徴候は聴力損失です。そして、多くの場合、聾であることは誕生時に診断されないため、両親の多くは我が子が先天性風疹症候群であることを知らずに退院していました。

先天性風疹症候群の後期発症

1960年代の風疹の世界的流行の時、オーストラリアの探求心のあるグループが1941年にオーストラリアで流行した風疹の影響を受けた子どもたちがその後どうなっているのか気になりました。

ある一団の研究者が、グレッグ医師の患者のうちの50人を見つけだし、風疹流行から25年後にインタビューと医学的検査を行いました。彼らは、このプロセスを数回繰り返して、その結果をまとめて出版しました。

そのグループのほとんどが聾でした。高い率で、糖尿病と緑内障がありました。60歳までに、10名が亡くなりました。4人は心臓血管系の原因、4人は悪性腫瘍（癌）、1人はAIDS、1人は肝硬変でした。そして、平均よりも高い率で甲状腺疾患、早期閉経、そして骨粗鬆症が報告されました。

これら後期発症に関して、ウイルスが生き残っている、ウイルスが再活性化する、ウイルスの影響があまりにも破壊的であったために臓器や系がより早く悪化する、自己免疫過程が始まるといったことが考えられました。

そして、ニューヨークでは、先天性風疹症候群により盲ろうとなった子ども達が教育年齢を過ぎて若年成人となった頃（1980年代後半）、彼らの行動及び健康状態に変化が起きてきたことに、親たちは気付くようになりました。情報を求めて、親たちは、ヘレンケラー・ナショナルセンター（HKNC）に連絡を取りました。

ヘレンケラー・ナショナルセンターは、盲ろう者の全国的な登録リストを発展維持し、全国的な親のネットワークを通して、先天性風疹症候群の親と連携し、全国的な支部のシステムとニューヨーク内に地域と繋がる多くの窓口を持っていますが、ニューヨークでの風疹の流行以来、先天性風疹症候群の子どもたちと関わってきたニューヨーク・セント・ルーズベルト病院に連絡を取りました。1990年代に病院が行った患者のフォローアップにおいて、糖尿病と緑内障の高い発生率が見いだされていました。私たちは、先天性風疹症候群により盲ろうとなったアメリカの若年成人についての調査を独自にすることを決定しました。

ヘレンケラー・ナショナルセンターは1990年に先天性風疹症候群の調査を行いました。保護者・介助者の39人に電話面接、88人に郵便調査を行いました。健康、行動、コミュニケーション、住んでいる場に関する課題について質問を行いました。親の持つパワーと親が持つ信じられないほどの情報について学ぶこととなりました。これが最後の調査ではなく、これから続く仕事の始まりであることを学びました。

調査の中で、後期発症として、以下の症状を認めました。緑内障の早期発症、糖尿病の早期発症、食道機能障害、甲状腺疾患、ホルモンの問題として早期閉経、多嚢胞卵巣、行動の変化として強迫性障害と激情等があげられました。

緑内障発症は、一般の人に比べて、先天性風疹症候群を有する人は、聾だけであっても緑内障の高いリスクがあること、定期的な眼科検査には緑内障の検査を含むべきこと、周辺視野を失ってきても、それを他者に伝えることができないかもしれないことを意味しています。

ヘレンケラー・ナショナルセンターの利用者中心型プランニング

先天性風疹症候群を有する成人の方の睡眠の問題、コミュニケーション、仕事、教育、余暇活動、住環境の選択といった課題に対し、「利用者中心型プランニング」という考えで検討していきます。

ヘレンケラー・ナショナルセンターのPATHプログラムについてですが、ハビリテーションのための利用者中心型アプローチの頭文字（Person Centered Approach To Habilitation）をとって、PATHプログラムと命名しています。受け入れられる訓練生の数は最大4名です。

訓練生と実際に交流するスタッフの数を限り、日常生活スキル、自立生活、レクリエーション、作業スキルに焦点を当てます。プログラムは、訓練生の興味・関心を念頭において、利用者中心型プランを使って企画されます。興味・関心は選択に繋がり、選択はその人の優先傾向となり、優先傾向はカフェテリアの仕事、クリーニング店、衣服点店、ベーカリーなどの仕事や余暇活動に繋がります。

先天性風疹症候群とヘレンケラー・ナショナルセンターについて

先天性風疹症候群は比較的新しい研究領域であり、先天性風疹症候群の人の数が世界的に減少する中、研究は予防ワクチン、他の病気や疾患に焦点が当てられてきました。また、先天性風疹症候群の人々は数が少ないだけでなく、地理的に分散し、かつ、多くはコミュニケーションの問題を有していること、先天性風疹症候群によって聾だけの障害を受けた多くの人々は社会にとけ込んでいるため本当のデータが得られないといった問題があります。

十分な研究の裏付けがなければ、ある特定の徴候が先天性風疹症候群から派生するのか、遺伝的なものなのか、明言することが困難です。時には、「盲ろう」であることから生じるものであって、先天性風疹症候群からではないこともあります。さらに、研究を必要とする領域です。

ヘレンケラー・ナショナルセンターでは、先天性風疹症候群のメーリングリストを開設しています。関心のある人のためであり、医療専門家と研究者のためです。2005年には、先天性風疹症候群の国際シンポジウムを開催し、Deafblind International（盲ろう支援者の国際組織）に風疹ネットワーク

をつくり、最初の会議を今年9月にオーストラリアで開く予定です。また、講演、出版、ウェブ、ニュースレターなどで情報の提供を行っています。

みなさんに

私たちの情報のほとんどは親御さんからの情報です。ご自分の直感に注意を払い、観察したことを記録しておいてください。

この講演は情報を提供するためであり、怖がらせるためのものではありません。先天性風疹症候群の青年や成人は自分から話すことができません。ですから、私たちは情報を分かち合うことが必要なのです。私たちがお互いに話し合いを続けることによって、どのような「後期発症」の問題が実際にあるのかが徐々にみえてきています。

恵江（中澤会長）と私ナンシーは、これからも協同して、みなさんの質問や心配事に対応していきたいと思えます。

分科会報告

【乳幼児期から小学部までの教育】

（１）学校における教育内容や、集団の中での活動について

まず、盲ろう児の家族の方からは、中学部進学に向けて、ろう学校が良いのか、養護学校が良いのか悩んでいることや、中学部になると教科担任制になり、授業によって担当教員が次々と入れ替わることが心配だということが出されました。

続いて各地の学校から様々な取り組みが報告されました。全体的に生徒数が減少する中で、集団の中で盲ろう児の存在をアピールしたり、前担任と連携をとりながら活動している様子、盲ろう児にとって、今必要な学習なのか、もう少し後で学習したい内容なのか、常に選択しながら取り組む様子等が報告されました。そして、学校でのカリキュラムを決定する際には、一人一人の子どもの課題から出発し、授業の中で何を大切にしていきたいのかを常に考えていく視点を持ち続けたいとの意見が出されました。また、午前中の講演内容をもう一度確認し、親御さんの観察が最も大切であり、その内容をぜひ学校にしっかり伝えて欲しいことが、指摘されました。

（２）学校間の連携について

家族の方からは、現在、自立の学習として盲学校で歩行訓練を行っている状況をお話しして頂きました。また、盲学校に在籍している場合、ろう学校で定期的な聴力検査を行ってもらえることが多いようでした。別の盲学校の教員からは、触る教材等、盲学校から提供できる教材を活用して欲しいことや、お互いにニーズを伝えあい、協力しあいたいという意見が出されました。

（３）盲ろう児の就業年数について

実践報告や講演でも話題になった内容です。アメリカ等では、障害者の教育が21歳まで保障されており、日本でも就業年数を延ばして欲しいという意見が圧倒的でした。そして、高等部卒業後の進路を考える際、どんな進路であっても、盲ろう者が、その人らしく生きていくことを大切にしたい、そのためには、学校のような集団生活の中で過ごしていくことができるようにしたいという意見が出されました。また、進路選択の一つとして、ろう学校の専攻科が提案され、専攻科のカリキュラム内容について情報交換を行いました。

この他、将来どのような生活をしていくのかを考え、学校教育の中で必要なことは何かを常に考えていきたいということは、参加者のみなさんが共通して考えていらっしゃる視点でしたが、この点については、「卒業後の生活・支援」分科会の内容を参考にしたいと思います。

【コミュニケーション】

最初に自己紹介を行い、それぞれの盲ろう児・者とのこれまでの関わりも話していただきました。

まず、保護者の立場から、お子さんのコミュニケーションに関して、現在困っていることが出され、そのことを中心にしながらコミュニケーションに関わる様々な話し合いが行われました。課題としている事柄として、コミュニケーションがなかなか広がらない、コミュニケーションの発信がない、獲得したサインが成長するにつれて、わからなくなってしまうなどが、具体的な事例を交えながらあげられました。

参加者の中から、子どもの様子について、いくつかやり取りがなされ、全員が共通の子ども像を持った上で話し合いがなされました。まず、盲ろう児にとって、コミュニケーションの取り方が一人一人違うことを押さえて、盲ろう児・者にとって核となる人の存在が大事であることも確認されました。そして、獲得された身振りサインを周りにきちんと伝えることがまず大事であること、盲ろう児・者にとって、その身振りが受信される場合、手の受け方が同じ方向かどうか、つまり発信者が、手のあて方をきちんと核となる人と同じであるかどうか分かっているかをまず確認してみる必要があること、微妙な違いではあるけれど、盲ろう児・者にとっては、違う意味になることもあり得ることを知っておくなどの点が確認されました。

また、盲ろう児・者が、受けての親や先生に自分からサインをぶつけているかどうか、その人に対する、信頼関係も表しているのではないかと指摘もありました。ある特定の先生としかやり取りが出来なかったり、その先生とならやり取りをしようとするのは、視点を変えれば、この先生じゃないと駄目という気持ちが育ってきていること、人を求める気持ちが育っているという事にもなるのではないかという意見が出されて、コミュニケーションを広げると言うことも大事だが、問題と見るのか、成長の一時期として必要なことと見るのかでも、大きな違いがあるのではないかという指摘もありました。

自分の世界がまずあって、外の世界への興味関心が呼び起こされることや、不快に関する気持ちの表出は、悲しい、嬉しい、わかった、わからない、共に、一緒になどの気持ちにも繋がり、きちんと原因理由が見つけれられると広がりが見られると言った実践からの報告がありました。

教師は、すぐに教えたいと思うけれど、その子の育ってきた歴史があり、好きなことがあり、嫌いなことがある、そういったその子にまつわる全てのことを十分に知り、分かることが何よりも大事という自戒を含めた発言もありました。

最後に、子どもが手をぐっと組んでくるといった、人を求める行為が出てきたことを発展させるために、その子にとって心地よい、たとえばマッサージを取り入れ、マッサージをやって、こっちにもやって、などやり取りに発展できないかという提案や、香りの良い物を一緒に作って飲んでみるとか、心地よさが伴うことをきっかけにやり取りが広がらないかという提案もなされて、示唆

に富んだ話し合いが行われました。

また来年、分科会で実践や成長を報告しあう約束をして散会しました。

【卒業後の生活・支援】

(1) 余暇活動について

コンピューターの普及によって、電子メールの活用が他者の介入なしに直接的に他者とのやりとりを楽しむことができる可能性を広げているとの報告がなされました。

また、レクリエーション活動を楽しむ重要性があげられ、さらに、それらの実際の活動の経験を当事者、支援者が共有していくことが、人的資源である支援者の環を広げていくことにつながるのではないかと、この意見が出されました。他者との関わりを大切に活動と同時に、自分一人の時間を楽しく、有効に過ごす方策も考えなければならないとの指摘も出されました。

(2) 学校教育の中で

先に挙げた余暇活動を充実したものとするためには、学校生活の中での育みが求められ、学習を通してルールのあるゲームの楽しさを知り、実物を用いることで実際の臨場感を楽しむこと、準備から片づけまでに参加することも、盲ろうの子ども達にとっては貴重な学習課題となることが話し合われました。

カリキュラムを組み替えて終日を校外学習とし、家族の参加が可能なスケート学習を行っている実践例も出され、学校教育の場で家族の共通の楽しみを見だし、それが将来の楽しみへとつながって行くことを期待しているとの報告が出されました。

また、特別なことではなく、日常生活を支える家事などに興味を持つことも卒業後の生活を豊かにするものと考えられること、さらに、卒業後も学校と家庭、地域との密接な連携の必要性が唱えられました。

参加者の多くが6・3・3制の限られた学校生活が終わった後の就労、進路、日常生活、社会参加、地域支援などに多くの不安と卒業後のイメージとそれに向けた基盤作りの模索など、大きく重い課題を抱え、その解決への糸口を見いだそうとしていました。個々のニーズや地域性には違いが存在しますが、盲ろうという障害がもたらす共通性を踏まえながら、継続した話し合いが必須だと痛感しました。

先天性盲ろう児・者プログラム

(1) 概要

以下の活動を行いました。

国立特別支援教育総合研究所(トランポリン・スヌーズレン)

筑波大学附属久里浜特別支援学校屋外プール、

海水浴、おやつのお買い出し、かき氷おやつ(スムージー)作り。

ボランティアの皆さんの協力により、夏らしい活動を思う存分楽しみました。

(2) 先輩と俺と友達と(参加者Tさんの言葉を借りて、活動の紹介をします)

オレはソファの上で、隣りに先輩が居るのを感じた。先輩もオレに気づいたようだ。暫くすると先輩からオレの手を触っていっぱい話しかけてくれた。

()内はその時のオレの気持ちです。

「オイオイ!! 私の首筋を触ってごらん(急にナッ何すか??)」、「手の指を

お互いの間に入れて組んでから力を入れると -ホーラ痛いだろ!!(イデッ)、「ほい！すね毛(ゲゲッ)」、「こらこらそんなに怒らないで(ダッテー無理に引っ張るから...)」、「ほらポンポンポン(はいポンポンポン)」。

あんまり楽しかったんで、オレも先輩に沢山話しかけた。「先輩、今マツクの臭いがしなかったすか??」、「やっぱそうだ、フライドポテトだ」、「先輩のあぐらを真似して、椅子の上に座ってみたっす」。

「先輩そういえば途中でやたらと力の強い女子が来ませんでしたか」、「プールで遊んでいた俺たちと同じくらい泳ぎの上手い先輩がいましたよね。あの先輩が休憩室のウオーターベットで他の子とプロレスやってたって知ってました。」、「オレの友達のMさんは親や先生の前で発表したんですって...何をっていわれても...さあ??」、「オレを置いて先輩は海水浴に行きましたね。気持ちよかったですでしょう」、「それにしても、フライドポテトを一本ずつ3本だけ配ったケチクセーッやつもいましたね」

「とにかくマジ楽しい2日間でしたね」、「先輩、友達、またどっかで会いましょうね」

楽しい楽しい手と手の会話がズーッと続いて、二人の間に厚い友情と信頼が育まれていくのを同じ部屋にいた皆が目撃しました。なかなか難しい盲ろう児者の直接的な関わり合いが、自然発生的に現れ、時々乱入する他の友達を交えて進んでいく様子が素晴らしかったです。

運営委員会・事務局より

第5回定期総会・研究協議会にご参加の皆様、お忙しい中、ありがとうございました。ボランティアの方々をはじめとしまして、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所、筑波大学附属久里浜特別支援学校の関係者の方々には、多大なるご協力をいただきましたこと、心よりお礼申し上げます。皆様からいただいたアンケートでは、暖かなねぎらいや励ましのことばとともに、今後の運営に対しても貴重なご意見をいただくことができました。今後もより充実した研究協議会となるよう努めてまいりますので、今後ともご協力のほど、宜しく願いいたします。

全国盲ろう教育研究会 第6回定期総会・研究協議会のお知らせ

日程：2008年8月17日(日)・18日(月)

場所：神奈川県民ホール

*今回は特別支援教育総合研究所の研修日程の関係で神奈川県民ホールで行います。

会費納入のお知らせ

会費(年2000円)納入にご協力ください。

- ・2007年度分までの会費納入がお済みでない方は、納入をお願いいたします。
- ・2008年度会費納入時期は、2008年4月1日～5月31日の予定です。

振込・振替先（みずほ銀行、またはゆうちょ銀行をご利用ください）

みずほ銀行 本郷支店

口座番号 普通預金 8062806

口座名義 全国盲ろう教育研究会会計 柴崎 美穂

ゆうちょ銀行（振替口座を開設いたしました）

口座番号 00100-6-484136

加入者名 全国盲ろう教育研究会

全国盲ろう教育研究会 第6回定期総会・研究協議会のお知らせ

日程：2008年8月17日（日）・18日（月）

場所：神奈川県民ホール

***今回は特別支援教育総合研究所の研修日程の
関係で神奈川県民ホールで行います。**